

ぶくぶく長々火の目小僧

鈴木三重吉

青空文庫

これは昔も昔も大昔のお話です。そのじぶんは今とすっかりちがつて、^{ねずみ}鼠でも靴くつをはいて歩いていました。そして猫を片はしから取って食べました。ろばも剣をつるしていばっていました。にわとりは、しじゆう犬をおっかけまわしていじめていました。

こんなに、^{なん}何でもものがさかさまだったときのことですから、今から言えば、それこそ昔も昔も大昔の、そのまたずつとずつと昔のお話です。だから、いろんなおかしなことばかり出て来ます。しかし、けっしてうそではありません。

そのころ或国あるの王さまに、美しい王女がありました。その王女を世界中の王さまや王子が、だれもかれもお嫁にほしがって、入りかわりもらいに来ました。

しかし王女は、どんなりっぱな人のところから話があつても、厭いやだ、と言つて、はねつけてしまいました。

世界中の王さまや王子たちは、それでもまだこりないで、なんども出かけて来ました。

王女は、うるさくてたまらないものですから、とうとうお父さまの王さまに向つて、

「ではだれでも三晩みばんの間あいだ、私わたしをお部屋の外へ出さないように、寝ずの番をして見せる人がありましたら、その方のお嫁になりまし

よう。」と言いました。

王さまはさつそくそのことを世界中へお知らせになりました。そのかわり、もし途中で少しでも眠りをすると、すぐにきり殺してしまうから、そのつもりでおいで下さいとお言いになりました。

すると方々の王さまや王子たちは、何だ、そんなことなら、だれにだって出来ると言つて、どんどんおしかけて来ました。

ところが、夜になって、王女のお部屋へとおされて、しばらく王女の顔を見ていると、どんな人でもついうとうと眠くなって、いつの間にかぐうぐう寝こんでしまいました。それで、来る人来る人が、一人ものこらず、みんな王さまにきり殺されてしまいま

した。

すると、或王さまのところに、鹿のようにきれいな、そしてたかのように勇^{いさま}ましい、年わかい王子がいました。この王子がその話を聞いて、私ならきつと眠らないで番をして見せる、一つ行ってためして来ようと思いました。

しかしお父さまの王さまは、王子がうっかり眠りでもしたらたいへんですから、いやいやそれはいけな^いいと言つて、どうしてもおゆるしになりませんでした。そうなる^とと王子はなおさらいきたくて、毎日々々、

「どうかいかせて下さいまし。たった三晩ぐらいのことですもの。かならず眠りはいたしません。」と言いな^がら、王さまにつきま

とつて、ねだりました。さすがの王さまもとうとう根まけこんをなすつて、それでは、どうなりとするがいいと、しかたなしにこう仰おつしやいました。

王子は大よろこびで、お金入れへお金をどつきり入れて、それから、よく切れるりっぱな剣をつるすが早いか、お供もつれないで、大勇おおいさみに勇んで出かけました。

二

王子は遠い遠い長い道をどんどん急いでいきました。

すると二日目に、途中で一人のふとつた男に出あいました。

その男はよつぽどからだがおもいと見えて、足を引きずるよう
にして、のツそり／＼歩いていました。

「もしもし、おまえさんはどこまでいくのです。」と、王子はそ
の男に話しかけました。

「私は、わたくし仕合せというものをさがしに世界中を歩いているのでご
ざいます。」と、そのふとつた男がこたえました。

「一たいあなたの商ばいは何です。」と王子は聞きました。

「私にはこれという商ばいはありません。ただ人の出来ないこ
とがたった一つ出来るだけでございます。」

「では、その人に出来ないことというのはどんなことです。」

「なに、たいしたことではございません。私はぶくぶくという名

前で、いつでも勝手なときに、ひとりでにからだかゴムの袋のようによくぶくぶくれれます。まず一いちれんたい聯隊ぐらいの兵たいなら、すっかり腹の中へはいるくらいふくれれます。」

ふとつた男はこう言つて、にたにた笑いながら、いきなりふうふうふくれ出して、またたく間まに往来一ぱいにつかえるくらいのも、大きな大きな大男になつて見せました。王子はびつくりして、

「ほほう、これはちようほうな男だ。どうです、きようから私のお供になつてくれませんか。私もちようど、お前さんと同じように、仕合せをさがして歩いているのだから。」と、聞いて見ました。するとぶくぶくはよろこんで、

「どうぞおともにつけて下さいまし。何よりの仕合せでございま

す。」と言つて、すぐに家来けらいになりました。

二人はそれからしばらく、てくてく歩いていきますと、こんどは向うから、まるで棒のようにやせた、ひよろ長い男が出て来ました。王子は、

「おや、へんなやつが来たぞ。」と思ひながらそばへいつて、

「もしもし、おまえさんはどこまでいくのです。」と聞きました。

「私は世界中を歩くのです。」と、その棒が言いました。

「一たいおまえさんは何商ばいのです。」と王子は聞きました。

「私には商ばいはありません。ただ人の出来ないことが、たった

一つ出来るだけでございます。私の名前は長ながなが々と申します。私

がちよいと、こう爪つま立ちをしますと、すうツと天まで手がとどき

ます。それから一と足で一里さきまでまたげます。このとおりです。」

棒はこう言うが早いか、たちまちするするとからだをのばしておやツという間に、もう高い高い雲の中へ頭をつつこんでしまいました。そして、ひよい〜と五足六足歩いたと思いますともう五、六里向うへとんでいました。それからまたひよい〜と、またたく間に目の前へかえつて来ました。王子は、「いや、これは便利な男がいたものだ。」と、すっかりかんしんして、

「これから私のお供になつてくれないか。」と言いました。

「へいへい、それはねがってもない幸でございます。」と、棒は

大喜びで、すぐに家来になりました。王子は二人をつれて、また
 どんどんいきました。そして間もなく、ある大きな森の中へ来ま
 した。

するとそこに、だれだか一人の男がいて、ぐるりの大きな木を
 片ツぱしからひきぬいては、どんどん積み上げていました。

王子は、

「もしもし、それをつみ上げてどうするのです。」と聞きました。
 するとその男は、

「なアに、ただ目から火をふいて、この丸太を一どきにもやすん
 です。」と言いなながら、じつと目をすえて、その山のようにつみ
 かさねた木をにらみつけました。すると、両方の目の中から、し

ゆうしゆうと、長い焰ほのおがふき出て、それだけの丸太をまたたく間に灰にしまいました。

「ほほう、これはすばらしい。どうです。私のお供になりませんか。」と王子は言いました。

「はいはい、どうぞおねがいます。」と、その男も家来になりました。この男は火ひの目小僧めこそうという名まえでした。

三

王子はこんなめずらしい男を三人まで家来にかかえたので、大だいとくいになって、どんどん歩いていきました。そのかわりこれま

でとちがつて、三人をやしなうのに、大そうなお金がかかりました。だって火の目小僧と長々ながながの二人は、ただあたりまえの人が食べるだけしか食べませんでした。もう一人のぶくぶくは、お腹なかがいくらでもひろがるので食べるもくく一どに牛肉の千貫目やパンの千本ぐらいは、どこへ入ったかわからないくらいです。そんな男に腹一ぱい食べさすには、とても一とおりのお金ではすみません。しかし王子は、ちつともいやな顔をしないで、食べたいだけ食べさせてどんどんお金をはらいました。

そのうちにやつとれいの王女のいる町へ着きました。王子はそのときはじめて、じぶんがはるばるここまで出て来たわけを三人に話して聞かせました。そしてどうか三晩とも眠らないで番をし

とおしたいものだ、そしてうまく王女をお嫁にもらったら、おまえたちにはどつきりほうびをやるといいました。三人は、それを聞いて、

「これまでだれにも出来なかったことをして見せれば、第一世界中の人にもいばれます。私たちも一しようけんめいにお手つだいいたします。」と、勇み立って言いました。

王子は三人にりっぱな着物を買って着せました。そして夜になると、みんなをつれて王さまの御殿へいって、どうか私に、王女さまの番をさせて下さいと申しこみました。

王さまはこころよく王子と家来とを一ひ間まにおとおしになりました。

王子はそのまえに、三人に向つて、どんなことがあつても、私
 がだれだということは人にしやべらないように、それから三人が、
 いぎというと、じきにすらすらのびたり、ぶくぶくふくれたり、
 火をふいたりすることも、かたくひみつにしておくように言いふ
 くめておきました。

王さまは王子に向つて、

「もしうっかりい眠りをして、王女を部屋からにがすと、おまえ
 たち四人の命を取るがそれでもいいか。」と、ねんをおおしにな
 りました。

「それはしようちしております。」と王子は答えました。

王さまは、よせばいいのと言わないばかりにたにたにお笑い

になつて、

「それでは、こちらへお出いでなさい。」とおつしやりながら、王子を、王女のお部屋へおつれになりました。王女はにこにこしながら出て来て、あいそうよく王子をむかえ入れました。王子は王女があんまりうつくしいので、目がくらんで、しばらくぼんやり立ちつくしていました。王女は、

「どうぞ。」と言って、一ばんきれいなすのところへつれていききました。

王さまは二人をそこにのこして、あちらへいつておしまいになりました。

その間あいだにぶくぶくは、そつと来て、王女のお部屋の戸の外へし

やがみました。それと一しよに、長々ながながと火の目小僧とは、こつそりと外そとへまわつてお部屋の窓の下へかくれました。

王女は王子に向つていろんなお話をしました。王子はそのお相手をしながら、一生けんめいに王女のそぶりに気をつけていました。するとやがて王女は、ふと話をやめて、そのままだまつてしまいました。そしてしばらくたつと、

「ああねむつたい。なんだかまつ赤かなもの、もうツと、まぶたの上へかぶさるような気がします。しばらくごめん下さい。」と言いながら、いきなり長いすの上に横になって、目をつぶつてしまいました。

四

王子はそれでもけっしてゆだんをしないで、じつと王女のようにすを見ていました。すると王女は間もなく、すやすやと寝入ってしまった。

王子はその長いすのそばのテーブルのところへいつて、ひじをついて、手のひらでおとがいをささえながら、目ばたきもしないで、王女の顔を見つめていました。

ところがそのうちに、王子はだんだんと、ひとりでにまぶたがおもくなつて、いつの間にかこくりこくりといねむりをはじめました。ぶくぶくや長々や、火の目小僧は、さつきから一生けんめ

いに耳をすましていました。

ところがちようど王子が眠りかけるころになると、この三人も、同じように眠けがさして、とうとうこくりこくりと寝てしまいました。

王女は王子がぐっすりねいつたのをかんづく^と、につこり笑つて、おき上りました。じつはさつきから、^{じようず}上手に寝たふりをして、王子が寝入るのをねらっていたのでした。

そしておき上るといきなり、ひよいと小さな鳩^{はと}になって窓からとび出しました。王女はこういうじゆうじぎいな魔法の力をもっているのです。これまで、どんな人が番に来ても、みんな王女をにがしたわけが、これでおわかりになったでしょう。

ところが今夜にかぎって、王女はついやりそこなつて、ままと火の目小僧と長々に見つかつてしまいました。それは鳩になつて、窓からとび出すはずみに、暗がりの中にこごんでいた長々の頭の髪へ、ぱたりと羽根をぶつけたからです。長々は、びつくりして目をあけて、

「おや、だれかにげ出したぞ。」と、どなりました。

火の目小僧も目をさまして、

「どっちだ〜。」と言いながら、目の玉に力を入れて、くるくる四方八方をにらみまわしました。するとそのたんびに、目の中からしゅうしゅうと、長い焰ほのおがとび出しました。そのために、にげかけていた鳩は、たちまち二つのつばさをまっ黒に焼きこがさ

れてしまいました。

鳩はびっくりして、じきそばにあつた高い木の先へとまりました。

そうすると長々は、たちまちするするとからだをのばして、その鳩をひよいと両手でつかまえてしまいました。

鳩はしかたなしに、もとの王女のすがたになつて、長々につれられて、お部屋へかえりました。

そんなことはちつとも知らないで、ぐうぐう寝ていた王子は、長々にゆり起されて、びっくりして目をさしました。

こんなわけで、王女はどうとうそのばんはにげ出すことが出来ませんでした。

五

あくる朝王さまは、王子がちゃんと王女の番をして、昨夜のま
まお部屋に坐すわっているのを見て、びつくりなさいました。

しかし、ともかく、王女をにがさないで、一ひと晩ばんじゆう中番をし
たのですから、どうするわけにもいきません。

王さまはしかたなしに、王子たちをていねいにおもてなしにな
って、その晩、もう一ど番をさせてごらんになりました。

そうするとその晩も、王子はまた眠りこんでしまいました。長
々とぶくぶくと火の目小僧の三人も、やっぱり同じようにいねむ

りをはじめました。

王女はそれを見すまして、今夜もまた鳩になつて、部屋をとび出しました。

するとやはり同じように、長々の頭にぶつかり、火の目小僧に羽根をやかれて、また長々につかまつてしまいました。

王さまはあくる朝になると、またびつくりなさいました。

そんなことで、三日目の今夜、また王女がしくじつたら、たった一人の王女を、どこのだれとも分らない、あの若ものに取りられてしまうのですから、王さまも、これはゆだんがならないとお思いになりました。

それで王女をこつそりとおよびになつて、

「今晚は魔法のおくの手をすつかり出して、かならずにげ出しておくれ。もし、しくじったら、おまえもただではおかないぞ。」ときびしくお言いわたしになりました。

王女は、

「かしこまりました。今晚こそは、きつとあの人たちをまかしてやります。」と言いました。

その間に、王子はまたぶくぶくと長々と火の目小僧あいだの三人をあつめて、今晚の手くばりをきめました。

「ではすっかりたのむよ。下手へたをすると、私ばかりではない、おまえたち三人のくびもとぶのだよ。」と、王子は笑いながらこう言いました。長々たち三人は、

「なに、だいじょうぶでございます。」と、すましていました。
そのうちにすっかり日がくれました。

王子はそれと一しよに、王女のお部屋へ行って、昨夜ゆうべと同じように、王女と向き合っついていすにかけました。

王子はもう今晚こそは、どんなことがあつても眠らないつもりで、息をのんで番をしていました。

すると王女は、しばらくたつと、またれいのように、

「ああねむいこと。まあ、どうしてこんなにねむくなるのでしょうか。何だか、まっ赤かなものが、もうつと両方の目の上にかぶさるような気がします。ちよつとやすみますからごめん下さい。」と言いながら、ふらふらと立ち上つて、長いすの上に横になるなり

もうすやすやと寝入ってしまいました。

王子は今晚はその手にのるものかと思いながら、テイブルに両ひじをついて、たかのように目を光らせて、一生けんめいに王女の顔を見すえていました。するとそのうちに、王子はまたひとりでに、まぶたがおもたくなつて、とうとう今晚もまたねこんでしまいました。

すると、ちようどおなじときに、あれほどこいばっていた長々や、ぶくぶくや、火の目小僧も、みんな一どにこくりこくりといねむりをはじめました。

王女はさつきから、上手にねたふりをして、王子たちが寝入るのをまっていたのでした。

王子はぐうぐうといびきをかいて、まるで石のようにねむりこんでいます。

王女はそれを見ると、にこにこ笑いながら、そうっとおき上りました。そしてこんどこそは、だれにも感づかれないように、ひよいと小さな蠅はえにばけて、すうつと窓からとび出しました。

ところが、うんわるく、今晚もそのはずみに、ひよいと火の目小僧の鼻の先にぶつかりました。火の目小僧はびっくりして、「しまった。にげたぞ。」と言いながら、いきなりしゅうしゅうと両方の目から火をふきました。

するとはえはたちまち小さな魚にばけて、向うの泉の中へとびこみました。火の目小僧はそれを見とどけて、長々とぶくぶくと

王子とをよびおこしました。みんなはびつくりして、はねおきて、火の目小僧と一しよに、その泉のそばへかけつけました。

六

いつて見ると、その泉というのは、まるでそこも見えないほどの深い深い泉でした。ところが長々は、

「なあに、おれがつかまえて見せる。」と言いながら、水の中へ頭をつきこんで、するするとかからだをそこまでのばしました。そして両手でもって、水のそこをすみからすみまでのこらさずかきさがしました。すると魚はどこへかくれているのか、いくらかきま

わしても、さっぱり見つかりません。ぶくぶくはそれを見て、

「おい、おどき。いいことがある。」と言いながら、長々をもとのからだにちぢめさせて、どぶんと泉の中へ入りました。そして、いきなり、ふうふうとからだをふくらして、とうとう泉一ぱいにふくらんでしまいました。

ですから、水はどんどんあふれ出して、大水のようにあたり一ぱいにひろがりました。王子とあとの二人は、その水の中をさがしまわりました。しかし魚はどこへいったものか、いくらさがしてもかげも見えません。火の目小僧はじれったがって、

「おいおいだめだよ、ぶくぶく。こんどはおれの番だ。」と言いました。ぶくぶくはしかたなしにいそいでからだをちぢめました。

それと一しよに、水は一どにもとの泉へかえりました。

火の目小僧は、水がすっかりもとのところへ入はいつてしまうと、「よし、来た。」と言いながら、大きく目をむいて、じいっと水の上をにらみつけました。すると二つの目からは、例のように長い焰ほのおがしゅうしゅうとび出しました。火の目小僧は、息をもつかないでいつまでもじいつとにらみつけににらんでいました。

ですからしまいには、泉一ぱいの水が、その焰でぐらぐらとわきたって、ちようど大釜おおがまのお湯がふきこぼれるように、土の上へふき上あがつて来ました。そのうちに、小さな一ぴきの魚が、半煮はんになえになつて、ひよこりと、地面へはね上あがりました。魚はもうあつくてくたまらないので、土にふれると、すぐにもとの王女にな

りました。王子は大よろこびで、そばへかけつけて

「どうぞです、とうとう三晩ともちやんとつかまえましたでしょう。ではおやくそくのとおり、あなたは私のものですよ。」と言いました。王女はまっ赤かな顔をして、

「どうぞおつれになって下さいまし。お父さまもあきらめて、あなたのおつしやるとおりになりますでしょう。」と言いました。

王子はそのときはじめて、

「じつは私は、これこれこういう王子です。」と言ってじぶんのことを話しました。王女はそれを聞かないさきから、だれとも分らないその王子の立派な人柄に、ないないかんしんしていました。それがりっぱな王子だと分ったので、おむこさんとして何一つ申

し分がありません。王女は大よろこびで夜があけるとすぐに王さまのところへいって、ゆうべのことをのこらずお話しはなしました。

すると王さまは、たった一人の王女を、知らない人にくれるのがおしくてくたまらないものですから、王子にあうと、王さまらしくもなく二まい舌をつかつて、

「あの子はだれにもやることは出来ない。」
と、おおこりにおこってこうおっしゃいました。

しかし王子は、そんなうそつきの王さまには相手にならないで、三人の家来に言いふくめて、王さまのすきまをねらって、王女を引つかかえさせて、おおいそぎで御殿を出てしまいました。

七

王さまは、ふと見ると王女がいつの間まにかいなくなっているもの
のですから、

「おや、たいへんだ。あの四人のものが、さらっていったにちが
いない。追っかけてうばいかえして来い。さあ早く早く。」とま
つ赤になつて御命令になりました。すると王さまの兵たいは、
「そらいけ。」と言うが早いか、何千人という大人だいにんずう数が、一ど
に馬にとびのつて、大風おおかぜのように、びゅうびゅうかけだしまし
た。

王子たちは王女の手を引いて、遠くまでにげて来ました。する

とやがて後うしろの方で、ぽか／＼と大そうなひづめの音が聞え出しました。王子は走りながら、

「おいおい、何だろう。」と三人の家来に言いました。

「おや、兵たいのようですよ。ああ、兵たいだ／＼。馬に乗った兵たいが大風のようにとんで来ます。」

火の目小僧は後を見るなりこう言いました。王女はそれを聞いて、

「では、きつと、お父さまの兵たいが、あなたがたを殺しにまいりましたのでしよう。ああいいことがございます。ちよつとおまち下さいまし。」と、息を切らしながらこう言つて、王子たちに手をはなしてもらいました。そのうちに騎兵は、

「うわあッ。」と、ときの声を上げて、王子たちのじき後まで追いつめて来ました。王女は王子にけががあつてはたいへんだと思つて、おおいそぎで、かぶつてゐる顔かけを引きはなしました。そのときちようど、風は兵たいの方へ向けてふいていました。王女はその顔かけをいそいで後へなげつけて、

「さあ、生はえておくれ。この顔かけの糸の数ほど生えておくれ。」と、おまじないの言葉をとなえました。すると、たちまちみんなのじき後へ、大きな木が、一どにぎつしり生えのびて、またたく間に大きな大深林だいしんりんが出来ました。兵たいたちは、

「おやッ。」と言つてまごまごしながら、その木の間をむりやりにくぐりぬけようともがきました。王子と三人の家来とは、その

ひまに、王女をつれて一しようけんめい^のにげのびました。

みんなはしばらく、かけつづけにかけた後^{のち}、やっと安心して一と休みしました。王子は、

「どうだ、まだ追っかけて来るか見てごらん。」と、火の目小僧に言いつけました。火の目小僧は、さつそくのび上つて見ますと、兵たいが今やつと、さつきの林をくぐりぬけて、またどどん砂けむりを立ててかけつけて来るのが見えました。王子は、

「では、ぐずぐずしてはいられない。さあにげよう。」と言つて立ち上りました。すると王女は、

「いえいえだいじょうぶでございます。もうすこし休んでいらつしやいまし。」と言いながら、目から涙を一としずくながして、

「さあ、涙、大きな河になっておくれ。」と言いました。するとたちまちそこへ大きな大きな河ができました。王子はそれで安心して、また王女の手をとってにげました。

みんなは、長い間どんどん走りつづけに走って、もうこれならだいじょうぶだろうと思いながらしばらく休みました。

「どうだ、まだ追っかけて来るか。」と、王子はもう一ど火の目小僧に見させました。火の目小僧は後うしろを向いて爪つまだ立ちをして、

「おや、とうとうあの河をわたって、また追っかけてまいります。」と言いました。王女はそれを聞くと、

「どういたしましたしょう。もう私の力ではどうすることも出来ません。どうかして、この昼を夜にする工夫はないものでございませ

ようか。」と言いました。すると長々は、

「ああ、それならどうさもありません。」と言いながら、からだを揺る揺るのびしました。そして、あツと言う間に天までのび上りました。みんなはびっくりして、何をするのかと見ていますと、長々はたかいたかい雲の中で帽子をぬいで、その帽子を、ひよいとお日さまの片がわへかぶせました。すると下界は王子たちのいる方に光がさすだけで、兵たいがかけて来る方の半分は、ふいに夜のようにまっくらになってしまいました。

王子たちは、兵たいが暗がりでもごまごましている間に、

「さあ、走れ走れ。」と言いながら、ふたたび王女の手をとって、おおいそぎでかけ出しました。長々は王子たちが、いいかげん遠

くまでにげのびたのを見すまして、ひよいと帽子をはずして、頭にかぶりしました。そして一と足で一里またげる、その長い足で、ひよいくくと、またたく間に王子のそばへ追いつきました。

それからみんなは、また一しよに走りつづけました。そのうちに向うの方に、王子の御殿のある町が見え出しました。王子は、「どうだ、兵たいはもうひきかえしたか。ちよつと見てくれ。」と、火の目小僧に言いました。火の目小僧はまた後あとをふりかえつて、

「おや、またじきあすこにすなけむり砂烟が見えます。これはたいへんだ。」とあわてました。すると、ぶくぶくが、

「じやアみなさんはかまわずおにげ下さい。私がここにのこつて、

ちやんとしますから。」と、王子たちをさきにながしました。

八

ぶくぶくはそのあとへ一人で立ちはだかつたまま、ぶくぶくくくと、見る見るうちに大きな大きな大山のようにふくれ上りました。そしてその大きな口をぱくりとあいて、

「さあ来い。」と言いながら、ゆうゆうとまちかまえていました。兵たいたちは、

「うわあ、うわあ。」と、ときのを声を上げて、死にもぐるいでかけつけて来ました。みんなは、もうこうなれば、たとい火の中

をくぐつても王女さまを取りかえして見せる、もし相手が王女をわたさないと言うなら、すぐに町をせめかこんで、町中のものを一人も残さず斬^きり殺してやろうと、こう腹をきめているのでした。間もなく兵たいたちは、ぶくぶくの口のまん前までかけて来ました。するとみんなは火の子のようにあわて切っているものですから、ぶくぶくの大きな口を町の入口の門とまちがえて、片はしからどんくどんくその口の中へとびこみました。ぶくぶくはその何千人という兵たいがすっかりお腹なかの中へはいつてしまおうと、「ははは。これでよし。」と笑いながら、そのままのそりのそりと町の方へ歩いていきました。

ぶくぶくはそれだけの兵たいを馬ぐるみお腹へ入れたのですか

ら、少し歩き悪くはありましたが、それでも大またにこのこと歩いて町へはいりました。

町中では王子がうまく寝ずの番をして、世界一のりっぱな王女をお嫁にもらってかえって来たというので、みんな大よろこびで、おどりさわぎました。王子はぶくぶくの姿を見ると、

「おお、かえったか。あの兵たいたちはどうした。」と聞きました。ぶくぶくはにたにた笑いながら大きなお腹なかをぼんとたたいて、「このとおりでございます。みんなこの中へ入れてしまいました。」と言いました。王子は、はつはと笑って、

「もういいから出しておやりよ。」と言いました。

「そうですね。兵たいや馬はこなれがわるいでしょうね。あとで

腹はらが下るとやっかいですから出してしましましょう。」

ぶくぶくはこう言つて、わざわざ町のまん中の大きな広場まで歩いていきました。町中のものは大山のような大きな大きな大男が来たのでびっくりして、わいわい言いながら、みんなでぞろぞろ後あとへついていきました。ぶくぶくは広場へ来ると、

「さあ、みんなどけどけ、あぶないぞく。」と言いながら、大通りにたかっている人を追いはらいました。そして両手で横腹をおさえて、

「ゴホンくくく。」と、せきをしました。するとそのたんびに腹の中から騎兵が十人ずつかたまつて、すぽんすぽんととび出しました。町のは、

「うわアうわア。」とおもしろがって、みんなで手をたたいてはやし立てました。ころがり出た騎兵たちは、死んだようにまつ青な顔をして、あとをも見ずににげていきました。ぶくぶくは、
「ゴホンく、ゴホンく。」と、せきつづけにせいて、とうとう何千人という騎兵を一人ものこさずはき出してしまいました。その一ばんしまいにとび出した兵たいは、戸まどいをして、ぶくぶくの鼻の穴へとびこんで、もがいていました。ぶくぶくは、
「ちよツ、うるさいね。」と言って、クシヤンと、くしやみをしました。するとその兵たいは、ぱたんと鼻の穴からふきとばされて、馬と一しよにころりころりながらにげていきました。

御殿では王子と王女との御婚礼の式をあげることになりました。

それで、王女のお父さまの王さまにも来ていただかないといけないというので、王子はいそいで長々ながながをおつかいに出しました。長々は例の足でひよい／＼と、一どに一里ずつまたいで、じきに向うの王さまの御殿へ着きました。

見ると、さっきの兵たいたちは、馬でにげて行つたくせに、まだ一人もかえりついていませんでした。

長々は先に着いたのを幸さいわいに、王さまに向つて、兵たいの大將の命を許しておやりになるように、よくおねがいしてやりました。それでないと、大將は王女をとりかえさないと空手からてでかえつて来たばつに、きつとくびをきられるにきまつていました。

王さまは、王女のお婿むこさんがそういう立派な王子だったと聞く

と、おおよろこびで、すぐにおともをつれて、王子のところへ出ていらつしやいました。それで御婚礼の式もとどこおりなくすみました。

王子をたすけているんな大てがらをした、ぶくぶくと長々と火の目小僧の三人は、大そうなごほうびをもらいました。

青空文庫情報

底本：「鈴木三重吉童話集」岩波文庫、岩波書店
1996（平成8）年11月18日第1刷発行

底本の親本：「鈴木三重吉童話全集」文泉堂書店
1975（昭和50）年9月初版発行

入力：今泉るり

校正：Juki

2000年2月15日公開

2005年12月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ぶくぶく長々火の目小僧

鈴木三重吉

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>